

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 滝 理江

論文題目 例示の機能をもつ助詞の意味分析
—認知言語学におけるカテゴリーの観点から—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	准教授	李 澤熊
委 員	名古屋大学	教授	堀江 薫
委 員	名古屋大学	教授	杉村 泰
委 員	名古屋大学	准教授	永澤 済

本論文は、いわゆる「例示」の機能を持つ現代日本語の助詞「ナド」「ナンカ」「ナンテ」「トカ」の意味・用法について、認知言語学におけるカテゴリーの観点から考察・記述したものである。並列助詞、副助詞、係助詞など、現代日本語における助詞の中には、例示の機能を持つものが複数存在するが、これら 4 語は、「例示」の機能を持つ助詞として代表的なものであるだけでなく、以下に示すように、「例を示す」意味・用法のほかに、「印象を弱める」「顕著なものを際立たせる」「否定的なものを際立たせる」というように、その意味・用法が多岐にわたる。

【例を示す】

(1) ムンクには、「叫び」のほかに、「マドンナ」や「病める子」などの（なんかの／なんて／とか）作品がある。

【印象を弱める】

(2) お客様、こちらの服など（なんか／なんて／とか）どうですか。

【顕著なものを際立たせる】

(3) このお店は人気で、昨日など（なんか／なんて／とか）、3 時間待ちだった。

【否定的なものを際立たせる】

(4) お前の顔など（なんか／なんて／とか）見たくもない。

しかし、これら 4 語について、上記のような複数の意味・用法間の関連性を含め、網羅的に考察・記述した先行研究は見当たらない。また、これら 4 語の類似する意味同士の違いについては、統語的な制約の差や、文体差に関する指摘にとどまっており、いわゆる類義語分析の観点からは、ほとんど考察されていない。

これに対し本論文では、以上の状況を踏まえて認知言語学における「カテゴリー化」の観点からのアプローチが有効であると考え、4 語について詳細に分析している。また、4 語の相互の意味の類似点・相違点については、豊富な実例を的確に用いて、緻密かつ精緻な分析を行っている。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

[本論文の概要]

第 1 章の序論では、研究の目的と分析対象、及び本論文の立場（分析方法）について述べている。

第 2 章では、本論文で考察対象とする語が、先行研究の助詞の分類においてどのように位置づけられてきたかについてまとめ、統語的な特徴の違いなどを踏まえて、考察対象語の助詞における位置づけを行っている。考察の結果、日本語記述文法研究会(2009)の「文のある要素をきわだたせ、同類の要素との関係を背景にして、特別な意味を加える」という定義に基づき、係助詞と副助詞を合わせたものとしての「とりたて助詞」に 4 語を位置づけている。ただし、「用言・助動詞への接続の可否」「格助詞への後接の可否」といった統語的特徴の差に基づき、「ナド、ナンカ」の意味のうち「複数の例を挙げる」ものは「並列詞」に、「トカ」の意味のうち「例示」に関するものは「並立助詞」として「とりたて助詞」の分類から分けることを提案している。

第 3 章では、本論文で行う意味分析の立場と方法、多義語分析の課題について述べている。また、本論文が依拠する理論的基盤である認知言語学におけるカテゴリー化、比喩、ネットワーク・モデルなどの諸概念について概観している。

第 4 章では、本論文で考察する語のより詳細な分析を行う前提として、先行研究における「例示」の持つ特徴を検討し、その分類基準を提示している。考察の結果、特に「例示」の意味に注目し、以下の 6 項目を提案している。

【明示された例に関する項目】

- ①複数例を明示できるか
- ②聞き手にとっての旧情報も明示できるか
- ③明示例が主題以外になり得るか

【暗示された例に関する項目】

- ④暗示されたカテゴリーが仮想ではない（明確に想定されている）か

【明示された例と暗示された例の関係に関する項目】

- ⑤明示された例と暗示された例が同時に実現されるか
- ⑥明示された例と暗示された例が並列的に設定されているか

第 5 章から第 8 章にわたっては、第 3 章で提示した多義語分析の課題と、第 4 章で提示した「例示」の分類基準を基に、「ナド」「ナンカ」「ナンテ」「トカ」の 4 語について精緻な意味記述を行っている。また、第 9 章では、考察対象とする 4 語の文体と統語的制約の違いについて概観し、第 5 章から第 8 章における考察結果に基づき、相互の意味の類似点・相違点について考察している。

以上の分析から、先行研究では分類しきれなかった用例が取り込める新たな分類（トカ意味⑤）を提示し、説明が不十分であった意味（ナド、ナンカ、ナンテの意味③）についてもより精緻な意味記述を行うことができた。また、分析にカテゴリーの観点を取り入れたことで、従来の研究では説明しきれいかなかった、意味同士の違い（ナンテ②－2 と④－2 など）が説明できるようになった。さらに、比喩の観点から意味間の関連性について検討した結果、すべての意味に「例を示す」という共通の機能があり、そこからメトニミーにより、様々な意味へと拡張していることが明らかになった。4 語の分析を通して明らかになった明示例とカテゴリーの組み合わせをまとめると、以下の 4 種類に分けることができる。

- A. 明示例：中心例 カテゴリー：典型例を中心とするもの
「ナド」意味①②、「ナンカ」意味①②、「ナンテ」意味①、「トカ」意味①②③
- B. 明示例：中心例 カテゴリー：顕著例（理想例）を中心とするもの
「ナド」意味③、「ナンカ」意味③、「トカ」意味③
- C. 明示例：周辺例 カテゴリー：典型例を中心とするもの
「ナンテ」意味②③、「トカ」意味④
- D. 明示例：周辺例 カテゴリー：理想例を中心とするもの
「ナンテ」意味④

それぞれの特徴としては、A の典型例については「想起しやすい」という特徴が、B の顕著例（理想例）については「特徴が顕著である（理想的である）」という特徴があることが先行研究でも指摘されてきたが、本論文ではさらに、C の典型例を中心とするカテゴリーの周辺例には「珍しさ」と

いう特徴が、D の理想例を中心とするカテゴリーの周辺例には「否定的な要素」が感じられるという特徴があることを明らかにしている。この周辺例の特徴はアド・ホック・カテゴリーの場合、さらに多様化する。さらに、類義語分析により、特に D には、周辺例であることから、想起できるものとしては「遠いもの」、つまり意識から「遠ざけたいもの」といった意味が出てくることを指摘している。

以上の考察により、「ナド」「ナンカ」「ナンテ」「トカ」という「例示」の機能を持つ助詞が、単純な「例示」にとどまらず、「印象を弱める」「特徴を際立たせる」「評価する」といった様々な意味・用法を持つのは、想起されるカテゴリーの違いによるものであることが明らかになった。明示例が、典型例、顕著例、理想例のうちのどの例を中心とするカテゴリーに属するものとして想起されているか、そしてその明示例が、カテゴリーの中心例であるか周辺例であるかによって、伝える意味が大きく異なる。本論文は、「例示」の機能を持つ助詞を使用あるいは理解する場合、「カテゴリー化」が重要な役割を担っていることを示している。

第 10 章では、本論文のまとめを行い、今後の課題について述べている。

[本論文の評価]

本論文は、現代日本語の助詞「ナド」「ナンカ」「ナンテ」「トカ」の意味・用法について、認知言語学におけるカテゴリーの観点から明らかにした好論文である。

本論文が高く評価できるのは以下のような点である。まず、本論文のテーマ設定（研究目的と考察対象）が明確に示されている。また、例示の機能を持つこれら 4 語の意味・用法に関する先行研究が十分に整理・検討されており、問題点などの指摘も妥当である。さらに、個々の語の意味・用法の記述においては、従来の研究よりも詳細な分析がなされている。

一方、審査員からは以下のような指摘もあった。まず、本論文の考察対象語が機能語ということもあり、その意味記述（説明内容）が複雑で分かりにくいという点である。他分野の人にも容易に理解できるように、より分かりやすく記述する工夫が必要である。また、意味分析の方法論についてもどのようにして複数の意味を設定していくかなど分析の手順をより明示的に示す必要がある。さらに、分析結果（各語の類似点・相違点）については、例えばアンケート調査を行うことによって客観性を高めるなど、より説得力のある記述が求められる。

上記のようなさらに検討・改善すべき点はあるものの、全体的にまとまりのあるものに仕上がっており、完成度の高い論文であると評価できる。以上の評価から、審査員は全員一致して、本論文が博士学位に相応しい内容と水準を備えていると判断した。